



rain 7



短編小説集

greentea0117

ノートから飛び出る

ノートから飛び出る

デッサンするのが好きだ。別にデザイナー志望でもなんでもない。ただのフリーターだ。デッサンするものはなんでもいい。目の前にあるテレビでも、昨日テレビに映っていたラッコでもなんでも。手を動かせばいつのまにか、画用紙の上にテレビやラッコが現れる。

これは子供のころからの、癖だった。退屈な授業中、することのない暇な日曜日、私はノートの隅に絵を描いた。最初は遠慮がちに、いつしか堂々と。ノートは絵で一杯になったけれど、誰に見せるでもなかった。

いつしか見たものの想像したものを、思った通りにデッサンできるようになっていた。鉛筆と紙を前にしたときだけ、私の背中には翼が生えた。私にとって絵は、自分だけの楽しみ。あのおせっかいな女に会うまで。

「ねえ、妙にうまいけど、ってというか、うますぎない？」

バイトのロッカールームでノートに絵を描いていると、同じフリーターの福留がのぞきこんできた。

「うんそうかな、ありがとう」

そういうふうに言われたときに返す常套句を、この時も言った。

「うんそうかなって、あんた」

福留はなおも言う。

「うんそうかなで終わらせる域を、超えてると思うんですけど」

「何、福留って、絵とかそういうの、詳しいの？」

「ううん、全然。でも誰が見たってすごいじゃん」

その時、私は竜の絵を描いていた。竜が悠々と空をいく姿だ。

「なんか絵から飛び出てきそうじゃん、その竜」

福留はあっさりと言った。私は改めて自分が描いた絵を見た。

「うーん、そうかもね」

ノートをリュックにしまおうとすると福留は、

「ねえ、そのノート見せてよ」

と言った。私は溜息をついた。

「次のバイトに行かなきゃいけないから」

不服そうな福留を残して、ロッカールームを出る。ノートを持っていないと、私はどうも落ち着かないのだ。

福留からメールがあったのは、それから一か月くらいしてからだ。

『なんか有名な画家の展覧会してるけど、興味ある？』

私は展覧会になんて行ったことがなかったし、そもそも福留自身、展覧会になんて興味があるのだろうか。好きな漫画家の原画展なら、少しは興味も湧いただろうけど。

『あんまり興味ないけど展覧会って行ったことないから、福留が行くんなら行くけど』

『じゃあ明日、三時に美術館で』

私は福留がメールに貼りつけてきた、美術館のURLを開く。

大きな美術館の前で、福留はぼつねんと待っていた。

「バイトが立て続けに休みになって、佐野くん、行くかなーと思って」

「うん、ありがと。でも俺、そういうアート系？ 目指してるわけじゃないけど。休みの日って寝てばかりだから、嬉しかったよ」

美術館の中は、静かだった。そう言えば子供の頃、遠足か何かで展覧会に行ったことがあったかもしれない。多分そのときは、ただ退屈しただけだっただろう。私は絵を、じっくりと眺めた。色の向こうにデッサン線が見えた。そして色は、目に楽しかった。私は思った。デッサンだけで、色がついているかのような、立体的な絵が描けないものだろうか？

美術館の中に喫茶店があって、私たちはそこに入った。私はコーヒーを頼み、福留は大きなオムライスを注文した。喫茶店は港に面していて、大型クレーンがおとなしい動物のように、等間隔に並んでいるのが見えた。

「これノート、見る？」

私はリュックからノートを取り出した。

「ほんと、いつでも持ち歩いてるんだね」

福留は目を丸くした。そしてノートをぱらりぱらり見ていたけれど、

「なんかこれ、オムライス食べながら見ていいもんじゃないね？」

と言って、がつがつと食べ、

「は？ 別にいいけど」

と言う私を無視して、早々に食事をすませた。

「なんか、すげーじゃん」

ノート一枚一枚を、福留はさっきの展覧会の絵のように丁寧に見ていた。私は次第に頬が紅潮した。福留の、乱雑に切られた艶やかな髪を眺めていた。

会社帰りの手芸教室

会社帰りに手芸教室に通っている。無心に手を動かしていると、会社でのストレスを忘れる。私が教室に通っていることは誰も知らない。私だけの息抜きの場だ。

その日は出来上がった作品を鞆に入れ、ご機嫌で帰宅した。ビールを飲み風呂に入り、健やかな眠りについた。

次の日、その作品を鞆に入れたまま、出社した。誰に見せるでもない、ささやかな私の楽しみ。昼休みにはそれを取り出して、ふわふわと触ってみたりした。短めのマフラー。片方の端がループ状になっていて、もう片方の端を入れて首に巻く。茶色で、緑色のアスタリスクをところどころ刺繍した。暖かい。

翌週、教室へ行くと、スーツを着たサラリーマンらしき人が、席に着き、不器用に手を動かしているのが驚いた。

「手芸に興味があるそうよ」

先生は言った。私はその人の斜め向かいに座った。マフラーを作り終わったので、次に何を作ろうかと胸躍らせていた。この教室のいいところは、編み物、縫い物など、何か一つの手芸に特化していないところだ。先生は分厚いファイルをもっている。様々な作品のレシピだ。その出来上がりの写真を見ながら、これと思ったものを選び作ることができる。作っている途中でどうしてもわからないところは必ず出てくる。おしゃべりをしながら、教えてもらいながら、気に入りの作品を少しずつ作っていく。

次はどの作品を作ろう、うきうきしながらファイルをめくる。めくりながら、針と糸で格闘しているサラリーマンの方を見る。内心少し、憤慨していた。女性ばかりだから気楽なのに。それに手芸なんてその人に全然合っていないように思えた。趣味が欲しければ、ランニングとか、魚釣りとか、そういうことにしておけばいいのに。

「矢代さん、そうそう、縫い目は大きくならないようにね」

先生がその人の手元を覗き込んで言った。よくよくみれば、その人はなんとティッシュケースを作っているようだ。一番簡単な裁縫作品と言えそうだが、男の人がティッシュケースに一体、何の用があるのだろう。

まあいい。私はファイルにある色とりどりの作品に目を奪われた。この教室に通い始めて三年目。ある程度、難しいものにも挑戦できるようになってきた。セーターでも編んでみようか。編み物はあまり得意じゃないけれど季節柄、新しいセーターが欲しいし、うまくいけばこの冬、自分で作ったものを着られるかもしれない。

私は編みこみのある茶色いセーターを作ることにした。私にとってはちょっとした挑戦だが、

まあこつこつやっていけば今年の冬には間に合わなくても、来年は着られるだろう。そう気楽に構えて編み棒に毛糸を取り付けていると、先生が、

「みなさん」

と呼びかけた。大体の生徒が集まったところだった。

「今日から入会する、矢代さんです。矢代さん、よかったら自己紹介どうぞ」

ティッシュケースと格闘していた矢代さんははっと顔を上げ、立ち上がった。

「あ、どうもすみません。矢代です。場違いとお思いでしょうが、どうか片隅に置いてやってください」

と言ったので、ちょっと笑い声が起こった。

「昔から指先が不器用でして……サラリーマンで指先を使う仕事は無く、このままだと一生不器用なままです。器用になりたくて。それになにか新しいことを始めたくて

私は矢代さんの気持ちが少しわかる気がした。スポーツは苦手だけど、あえて野球教室に行く、とか。子供のころは苦手なことはできるだけしたくないし、格好悪いところを見せたくないけれど。大人になると、いままでずっとしなかった苦手なことをあえてすることで、自分の中の何らかの扉が開くような気がする。でもだからといって、ティッシュケース……。ちょっと笑える。

とっつきやすそうな雰囲気だったので、みな矢代さんの周りに集まってきた。私はその斜め前で編み棒を動かしていたが、矢代さんはそれを見て、

「いやーすごい」

と呟くように言った。

「いやー」

私は言った。

「例えるなら、男の子がわけなくリフティングできるのを、女子がすごいと思う感じなんじゃないですか」

「あー、あ？ うんうん、そうかもしれない」

矢代さんは少し混乱した様子でうなずいた。

「いつかそんなふうにした通り作れるようになりたいですよ」

「わたしだって別に、思った通り作れたりするわけじゃないですよ」

私は手を止めることなく言った。それにしても物を作りたいなら、陶芸とかあるだろうに、なんでまた手芸なんだろう、ときどき矢代さんの手元を見ながら思った。

できかけのティッシュケースに針をさして自分の棚にしまい、矢代さんは帰っていった。私も自分の棚に、編みかけのセーターを入れる。家に持って帰ってさくっと仕上げってしまう人もいるけど、私にとって手芸教室はいつもと違う時間を過ごす場所、いわば異空間なのだ。作品を家に持って帰ってしまっは、その新鮮さが薄れる。

次に教室へ行ったら矢代さんはやはりもう来ていて、今日は背広を脱いでティッシュケースと格闘していた。私を見ると、どうも、という感じで頭を下げた。私も棚から編みかけのセーターを取り出し、続きを編む。

「あら南部さん、そんな隅に座って」

先生が入ってきて言った。

「ああ、ちょっと集中したくて」

私が言うと、

「やっぱり男なんか入ってきたら、お邪魔ですかね」

と矢代さんが言った。

「あら、そんなことないわよ。新しいメンバーが入ってくるのはいつだって歓迎よ。男性だろうと、女性だろうと。ねえ」

先生が言ったので、私もうなずいた。

「そうですね。私なんかは、会社以外の場所が欲しくてここに来てるんです。もし、会社の人がここに入ってきたら、それは嫌ですけど、新しい人が入ってくるのは歓迎ですよ」

と言った。矢代さんはそれを額面通りに受け取ったらしく、

「そうですか」

とほっとした表情になり、自分のティッシュケースに戻っていった。

帰りの電車は、矢代さんと一緒になった。

「矢代さんあのティッシュケース、できたらやっぱり使うんですか？」

私は聞いてみた。

「え？　そうですね。せっかくなので使います」

「そうですか」

「矢代さんは？　やっぱりあのセーターは、誰かへのプレゼントなんですか？」

はあ？　思ってもないことを聞かれた。

「いえ、違います。自分のために編んでます。今年の冬には間に合わないかもしれないけど、来年なら着られると思うし」

「そうですか」

なんとなく言い返されたような気分になって、つり革につかまる矢代さんの横顔を睨んだ。その顔は若く無頓着で、どんよりとした疲れの漂う車内の中、一人だけ妙に浮いて見えた。

モデル三兄弟

三人兄弟の末っ子だった。一番上の兄は金髪に茶色い目、二番目の兄は茶色の髪に黒い瞳、そして私は金髪に青い目だった。二番目の兄と私とは一才しか違わず、そしてとてもよく似ていた。でも性格は正反対だ。私は活発でおてんば、二番目の兄は繊細でおとなしかった。上からルーク、マイク、キャサリンといった。ルークは何かとトラブルを起こす下二人の面倒をよくみてくれた。

例えば私は、クラスメートのかばんにカエルの死体を入れたり、授業中にけんかを始めたりした。校長室につれていかれ、むっつりとしている私のため、とりあえず呼ばれるのは、ルークだった。先生たちもルークを呼びさえすれば、ことは収まると考えているようだった。ルークは学業優秀で品行方正、人望もあり、学級委員の常連だった。

泣き虫でしょっちゅう学校を休もうとするマイクを、なだめすかせて登校させるのもルークの役目だった。意地の悪い私の目から見ても、ルークは本当にやさしかった。私もルークの言うことには弱かった。ひねくれ者の私を、するんとまっすぐにしてしまう力をルークは持っていた。私は学校で友達をたくさん作った。トラブルメーカーではあったけれど、友達には不自由しなかった。

マイクは異様に絵がうまかった。いつもはマイクのことをばかにしている私も、その点だけは一目置いていた。マイクは自分の頭の中にあることを絵にしてみせるのだ。私が言葉にできなくてもどかしく思う感情（それが学校でのトラブルの大元なのだが）を、不思議な絵で表現した。私はマイクの絵が好きで好きでたまらなかった。

あるときマイクが泣きながら、私の教室へやってきた。見ると手にはびりびりに破かれた画用紙を持っている。

「どいつ？」

私が色めき立ったとき、

「何やってんだお前ら」

運悪く、ルークが通りかかった。

「誰かが、マイクの絵を破いた」

私は息巻いた。

「そいつをやっつけに行く」

「ふうん」

次の瞬間、ルークはがっちりと私を羽交い絞めにした。

「お前、これ以上問題起こしたら、退学だぞ」

「そんなことどうでもいい、離せ」

私はわめいたけれど、ルークの腕は機械のようにがっちりと私を離さない。

「もういいよ、キャサリン」

マイクはまだ目に涙をためて言った。

「キャサリンが退学になったら困る」

でもこの日を境に、マイクはますます学校へ行かなくなった。困った母さんはマイクと私を別の学校へ移すことにした。私はルークも一緒じゃないと絶対に行かないと宣言し、マイクと二人、ずっと家に籠城していた。やがてルークが説き伏せて、三人で新しい学校の見学へ行くまで。

新しい学校の教室は私が幼稚園のころいた教室を思い出させた。カラフルでいろんな道具が置いてあって。机もきっちりと並べてなくて、生徒はおもいおもいの場所に座っているようだ。

「マイクはどうかかわからないけど、私はここに来たって変わらないよ。ここに来るんだったら、ルークも一緒じゃなきゃ」

私は言った。

「俺は正直、どっちでもいいよ」

ルークは言った。

「でも三人、一生くっついているわけにはいかないんだぞ」

私はルークを見た。ルークがそんなことを言うなんて、信じられなかった。

「見損なったよ、ルーク」

私は言った。傷ついていた。でも見ればルークの方が、顔を歪めていた。

「傷ついたのは、私たちの方よ。そんな顔しないでよ」

「やめろよ、キャサリン」

マイクがおろおろと言った。

このことをきっかけに私とルークの間に小さな溝ができた。最初は、きっとルークがなんとかしてくれると思っていた。でも結局ルークは元いた学校、私とマイクは新しい学校へ移ったので、私たちが学校で問題を起こしても、ルークが飛んで来ることはなくなった。

「私たちの面倒をみなくてよくなって、ほっとしてるんでしょ」

家に帰れば、私はルークにそんな憎まれ口をたたいた。

「そんなことあるわけないだろ」

ルークは確かになんとかしてくれようとした。ルークだって、また元通りの私たちに戻れると思っていたのだ。でも私が大好きな釣りにルークが連れて行ってくれても、なんだか前のようにはしゃげなかった。何もかもがいやになったとき私が逃げ込む木の上に、いつものようにルークが迎えに来てくれても、差し出されたその手をつかむことができなかった。本当は差し出したくてうずうずしている右手を、左手がなぜだか必死に押さええていたのだ。いつも三人、団子のようにぎゅうぎゅうと固まっていた私たちは、一人と二人になってしまった。

新しい学校で、私はなぜか静かな子になっていた。そもそも自由な雰囲気のある学校で、無理をしなくても馴染めたからかもしれないし、ルークがいないということが私を意気消沈させ、またブレーキをかけたのかもしれない。でも内心私はくそくらえ！ と思っていた。その黒い気持ちは、いつも私のどこかにあって、一見おとなしく過ごしている私の中で、徐々に大きくなっていった。

マイクはそのことに敏感だった。私が何をしでかすか恐ろしくて、逆に毎日学校へ来るようになった。ある日私は突然椅子を担いで、窓へ放り投げた。ガラスは気持ちがいいくらい見事に割れ、椅子は三階下の地面に落ちて砕け散った。

「ほーほー！」

私は久しぶりに気分が晴れ晴れとした。ルークの代わりにマイクが飛んできた。マイクは落ちたのが私じゃなくて椅子だと知ると、安心してかおんおんと泣きだした。私は得意気に先生を見た。元の学校だったら校長室へ行って、それから即、退学だろう。でも先生はこう言っただけだった。

「この手袋をはめていらっしやい。後片付けするんです」

私は割れたガラスに触れるのが嬉しくて、先生についていった。そして先生と一緒にガラスや椅子の破片を、袋に入れた。

「先生、ごめ、ごめ、ごめ、」

私は言い淀んだ。泣き止んだマイクが、横で突っ立っていた。

マイクは絵を描いた。マイクが頭の中にあることではなくて、実際のことを絵にするのは初めてじゃないだろうか？ それはいつもの複雑な線画のような絵では無く、まるで幼児が描いたよ

うな絵だった。水色のガラスが飛び散って、かかしの絵のような私と先生とマイクがいた。でも私は一目でその絵が好きになった。ガラスの水色がとてもきれいだったから。

マイクと私は、手を繋いで学校へ行く。ルークはいないけれど、私たちは私たちでなんとかやっていた。マイクは線画だけじゃなくて、色の絵をよく描くようになった。線画は、すごい！ というかんじだけれど、反対に色の絵は、とっても拙い。マイクはたくさんの色の絵を私にくれた。私はそれをバインダーに挟んで持ち歩いた。

高校生になっても私とマイクは、基本的に小学生の頃と変わらなかった。人目はばからず手を繋いでいた。もう人から何と言われても、気にする時期を過ぎていた。変わったことといえば、私たちがモデルの仕事を始めたこと。そう、ルークも含め、三人で。最初にスカウトされたのは、ルークだった。ルークは大学生で、弁護士を目指していた。ルークにモデルと一緒にしないかと言われたとき、私は素直に頷きかねた。

私たちを捨てたくせに！

でもルークは大学進学を機に家を出ることもできたのに、そうしなかったのは、私たちを心配してのことだとマイクに言われたとき、私はまじまじとマイクを見た。マイクはできの悪い、頼りない兄だったはずだ。いつも泣いて私かルークの教室にやってきて、みそっかすで。みそっかす？ いつまでもうじうじと泣いているのは、誰だ？

そういうわけで、三人は再結成した。私はちょっとは成長したつもりでいたけれど、モデルの仕事をしっかきにまたルークに甘えるようになった。マイクと私は分身のようだった。でもルークはちょっと高いところから、私のことを理解してくれるのだ。そう、ほんとはわかっていた！

いつだってルークは私やマイクのことを、ちょっと高いところから見てくれていたのだ。モデルの仕事は三人がばらばらだと、あまり面白くなかった。ポージングだってぎこちない。でも私たちが所属している事務所が、

「あんたたち、三人でちょっとポージングしてみて」

と三人で映ると、私たちの体は自由に動いた。自由に、しなやかに！ それは踊っている時の気分 に似ている。でももっと、楽しい！ 私たちはひと時、うなぎのぼりで人気が出て、高級ブランドのモデルをつとめるまでになった。でも私は自分の進路に密かに悩んでいた。ルークは弁護士、マイクは高校を卒業したら美術学校へ行くつもりだ。ずっと三人で遊ぶみたいにモデルをするのは、いつか終わりが来る。私は高校を出たらどうしたらいいのかさっぱりわからなかった。いつだって誰かに理解してほしいと叫び、ルークやマイクに甘えていたけれど、自分がどんな道に進みたいか、そんなことすらわからないほど何も見えちゃいなかった。モデルの仕事は好きだけれど、三人でやればこそ。一人でやっていくほど、の世界を好きにはなれない。

「モデルの仕事、好きになれないって、どうして？」

スタイリストのケリーは一回り年上で、スタイリストなのにすごく太っている。

「いがみあいが多し。ねたみが渦巻いてるし」

「そうねえ、でも気づかなかった？ どこでもそうよ」

「そうね」

私は溜息をついた。

「うんざりしてる」

「モデルの仕事に？」

「ううん、学校とかもそうだったし。マイクとくっついて、マイクが絵を描くのばかり見てた」

「もうそうばかりもいかないでしょう」

「うん、それはわかってるんだけどさ」

私はケリーが編み上げてくれた髪を見た。細かな編みこみが耳の後ろから頭頂部へとカーブを描いている。

「なんかさ、私、もっと違うことしたいような気がするんだよ」

私は言った。

「なんかもっと、なんていうか……」

私は言葉を探した。

「自分で何かしたいっていうか」

「何か？」

「そう。何かはわからないけど」

ケリーは私の頭のヘアピンをぐっぐっと押しながら、

「いいじゃない、それ」

と言った。

「そうしたらいいじゃない」

「でもそれが何かわからない」

「そういう時のために大学があるんじゃないの？」

「でも私、ルークもマイクもいない学校って、なんかあんまり行きたくない」

「はあ」

ケリーは大きな息をついた。

「売れっ子モデルが、ここまでだめな子だって思わなかった」

はっきりとしたケリーの言葉に思わず笑った。

学校を見回す。私は三年生になり、マイクはとうとう一足先に卒業してしまった。卒業式の日、マイクは私に行った。

「美術学校にいつでもおいで。また二人で手を繋いで歩けばいい」

私は首を振った。

「そうはいつでも、この学校ではもう私一人だし。ちょっと考えてみたい、私も卒業したらどうするのか。一人で」

「ほほう」

マイクはほくそ笑んだ。

「なんかつままないね」

マイクは言った。

「つままないよ」

私も言った。

「でもつまらないことにもなれないとだめ」

「どうしてそんなつままないことなの？」

マイクは言った。

「はちゃめちゃでもいい」

「だめだよ」

私は兄弟の一人として、初めて責任感を持って言った。